

# 万機公論に決すべし

篠田 芳明 陸自 69

慶応4年（明治元年）3月14日に公布された「五箇条の御誓文」の第1項に「広く会議を興し万機公論に決すべし」と言う民主主義を象徴する言葉が

燦然と輝いているが、その頃は万機（主として行政分野の様々な決定事項等）の各項目またはテーマについて「論を述べる」人たちが自身がその時「決すべき論旨」を熟知し、自分の信念を明確にして、発言するからには責任を持って行動していたと思う。

この「万機公論に決す」の姿勢は、民主主義を掲げる国家において社会を律する最も重要な原点である。

我が国は、太平の世を謳歌していた江戸時代の鎖国から目覚めた瞬間、西欧近代国家群の植民地にされまいと実力をつける必要に迫られた。それを達成する重要なキーワードの一つが「万機公論に決すべし」であり、至短時間内に多くの日本人の知恵を結集して奇跡ともいえる近代国家建設に成功した。

そして今、我々は明治の先達の熟慮と行動する勇氣のお蔭で、植民地化の

魔の手から逃れ、世界でも有数の民主主義国家になったと多くの国民が自負しており、その通りである事は論を待たない。

しかし私は、現時点で日本が世界有数の民主的國家の体制を整えているとは思いますが、明治の頃に比べ本當の意味での民主主義の精神は後退している点が多々あるように思っている。

明治初期、國を代表する政治家達は「自分の発言を実行に移した時点で誤りであつたと判明した場合」腹を切る覚悟で真剣に考え、悩み、最善の方策実行の可能性を詰めながら結論を出して発言していたと思う。このような命懸けの「公論」の上で万機が決定されていった事から本當の意味で現在よりは、より民主主義の理想に近かつた。

ところが近年、とりわけバブル崩壊以降、大衆受けが良いが実を伴わない理想論や単なる他人あるいは書物から得た知識での意見や発言はするが、その結果が思わしくないと判断すると、こそこそ逃げ隠れる卑怯者が横行する様になった。これでは民主主義には程遠い烏合の衆に過ぎず、日本を豊かにする活力や原動力にはなり得ない。

どうしてその様に軽率な発言をする人物が日本國の最高立法機關である國會に送り込まれる様になつたのであるのか？ と私はよく考える。

その要因の一つが大東亞戰爭敗戦の結果、進められた強力な占領政策によつて日本民族が骨抜きにされた事に有ると思う。終戦直後、一日本には素晴らしい精神文化が有つた」事を著述する様な文書は、占領軍のWGIP政策（注）によつて悉く破棄された。そして、

学校の歴史教育現場では、「歴史的に日本民族の誇るべき美談」が占領政策の中核を握つたGHQによりその多くが消し去られ、民族の誇りを持たない日本人が数多く社会に送り出された。

しかし、詳細は省くが、あのマッカーサー元帥でさえ、後に「あの第2次世界大戦前夜當時の日本の様に追い詰められればどの様な小國であろうと『誇りある民族であれば』開戦を決意したであろう」と米國議會の公聴会で証言したことから、ある程度占領政策が行き過ぎであつたと類推されていた。

戦前の日本では幼少期から各國民には自分で色々な事を考え、行動し、責任を持つ精神的要素の重要性が当たり前のように教育されていた。しかし、敗戦を境にして戦後は知識を詰め込み、公平・平等・安全が極端に強調され、精神要素を軽視する教育が推進された結果、受動的な思考形態が日本人の無気力化を促進し、責任を分散して個人に大きな負担を負わせない（誤つた平等主義の）世相に変形してしまつた事

が大きい。そして、極めつけは國運を担う國會議員の選出に当たつても、多くの國民が自ら情報を集めてどの様な人物に明日の日本を託するかと考える努力をしないで、風評や雰囲気流されて軽率に選ぶ事が大きいと思う。

そして選挙の結果、中には能力と実行力は乏しいが、風評を自分の有利な様に操作する事には長け、その時々々の流れを上手く泳ごうとする近視眼的人物が紛れ込んで、正當な議論を混乱させる。その様な質の低い人物が集まつては「万機公論に決すべき」民主主義の形式だけを整えているが、本質を逸脱するばかりで議論が発散し、正論を見失つて、行く行くは日本丸の進路を氷海に誘導してしまふ危険性が高くなる。

未永い日本の平和と安寧のために、真に實力ある人材を重要ポストに送り込んで、足腰の強い民主主義國家に回帰しなければ、ひ弱な二流國家に転落してしまふ、と私は危惧している。そうなつてから反省しても遅すぎる！

注：WGIP政策（War Guilt Information Program）ーウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム。米占領軍の日本洗脳工作をさす。